甲　第　号

田邊　香　学位請求論文

審　査　要　旨

奈　良　県　立　医　科　大　学

論 文 審 査 の 要 旨 及 び 担 当 者

論文審査担当者	委員長	教授	斎藤　能彦
	委員	教授	野上　恵嗣
	委員（指導教員）	教授	鶴屋　和彦

主論文

Association of initial prednisolone dose with remission, relapse, and infectious complications in adult-onset minimal change disease

成人発症の微小変化型ネフローゼ症候群に対するプレドニゾロン初期投与量と，寛解，再発，及び感染症との関連

Kaori Tanabe, Ken-Ichi Samejima, Fumihiro Fukata, Takaaki Kosugi,
Hideo Tsushima, Katsuhiko Morimoto, Keisuke Okamoto, Masaru Matsui,
Masahiro Eriguchi, Naoki Maruyama, Yasuhiro Akai, Kazuhiko Tsuruya
Clinical and Experimental Nephrology. 2021 Aug 7.doi: 10.1007/s10157-021-02119-3. Online ahead of print.

論文審査の要旨

本研究は、当院で腎生検および初期治療が行われた微小変化型ネフローゼ症候群（MCNS）の 91 例を対象に、初期治療としての体重あたりのプレドニゾロン（PSL）投与量と臨床経過との関係を検討した後向き観察研究で、PSL 投与量の中央値（0.63 mg/kg/日）以上の高用量群と中央値より少ない低用量群の 2 群に分けて，その後の寛解率，再発率，感染症などの合併症について比較検討し，両群間の効果および合併症に有意差がなく，ステロイド総投与量においては低用量群で有意に少なかったことを示し，MCNS の初期治療におけるステロイド低用量の有用性を明らかにした。

公聴会の発表は非常にわかりやすく、要領よくまとめられていた。質疑応答も、重症例の場合にも低用量で大丈夫か、どこまで用量を下げれるか、初期投与量で寛解後の減量に差がなかったか、ステロイド高用量を投与している他の研究と感染症について差がなかったか、体重あたりではない実際の投与量別で経過に差がなかったか、などの質問に対し、適切かつ明確な返答が行われた。

今後の臨床において非常に有益な研究で、公聴会の発表、質疑応答も併せて、学位論文に十分に値すると思われた。

参　考　論　文

1. Renal arteriolar hyalinosis, not intimal thickening in large arteries, is associated with cardiovascular events in people with biopsy-proven diabetic nephropathy. Morimoto K, Matsui M, Samejima K, Kanki T, Nishimoto M, Tanabe K, Murashima M, Eriguchi M, Akai Y, Iwano M, Shiiki H, Yamada H, Kanauchi M, Dohi K, Tsuruya K, Saito Y. Diabet Med. 2020 Dec;37(12):2143-2152

以上、主論文に報告された研究成績は、参考論文とともに腎臓病態制御医学の進歩に寄与するところが大きいと認める。

令和３年１２月１４日

学位審査委員長

循環器病態制御医学

教授　　斎藤　能彦

学位審査委員

発達・成育医学

教授　　野上　恵嗣

学位審査委員（指導教員）

腎臓病態制御医学

教授　　鶴屋　和彦